小田実全集〔評論　第１巻〕

何でも見てやろう

講談社

小田実全集

Makoto Oda

サンプル版

▲　シカゴでのスナップ。老人は新聞を拾おうとしている。以後，私も彼にならい，新聞は拾って読むことにしたのである。

▼　ニューヨーク，マクソリーのバー。ドイツ生れの老移民は私にエールをおごってくれたあとで，居眠りをはじめた。

▲　ニューヨーク，グリニッチ・ビリッジ。芸術家と芸術家の卵と，それに数倍するそれを見物に来たひとたちの「村」。

目次

まあなんとかなるやろ――「留学生業」開業――　10
何でも見てやろう――美術館から共同便所まで――　19
「考える人」――いよいよ出発――　25
ビート猫・ZEN猫――アメリカ（猫）の悲劇――　37
ゲイ・バーの憂鬱――アメリカ社会の底――　43
アメリカの匂い――さびしい逃亡者「ビート」――　51
ヒバチからZENまで――アメリカの「日本ブーム」――　64
ハーバードの左まき「日本人」――アメリカ人ばなれのした人たち――　71
幸福者の眼――アメリカの知識人――　74
松の木の下にウナギ――ニューヨーク貧乏案内――　83
フランス語を学ぶには――カナダ紀行――　93
黒と白のあいだ――南部での感想――　121
「月世界」紀行――「文化大使」メキシコへ赴任す――　137
メキシコ天一坊――シケイロス氏らと会う――　153

「資本主義国」U・S・S・R――一日一ドル予算の周囲――　173
Sick, Sick, Sick……しかし――そしてオデュセウスの船出――　183
フィッシュ・エンド・チップス――アングリー・ヤングメン「怒れる若者たち」のなかみ――　194
あいるらんどのような田舎へ行こう――ズーズー弁英語の国――　203
「求職」あるいは「おしのび」旅行
――北欧早まわり、オスロからコペンハーゲンへ――　210
金髪と白い肌は憧れる――「サムライ」の魅力――　218
ユース・ホステルの「小便大僧」たち
――ハンブルグ、アムステルダム、ブラッセル――　223
ビデとカテドラル――アメリカの女の子とパリを観れば――　229
「反小説」（アンチ・ロマン）の財布――ロブグリエ氏会見記および世界各国作家清貧物語――
ニセ学生スペイン版――アンダルシア放浪記――　253
ビザを買う話――貧乏旅行の悲喜劇――　279
「ルパナーレ」の帽子――イタリア貧乏滞在記――　285
パン屋のデモステネス君、仕立て屋のアリストテレス氏
――ギリシア無銭旅行――　300

アクロポリスの丘――ギリシア、そして「西洋」の意味――　317
腐敗と希望――ピラミッドの下で考える――　323
ナセル氏「随行」記――エジプトからシリア、レバノンへ――　341
たがいにむかいあう二つの眼について――イランの「外人」のなかで――　348
のぞきメガネ「ヨーロッパ」――テヘランをうろつく――　365
にわかヒンズー教徒聖河ガンジスへ行く――ニュー・デリーからベナレスへ――
不可触賤民（アンタッチャブル）小田実氏――カルカッタの「街路族」――　391
アミーバの偽足――むすび・ふたたび日本島へ――　401
再訪　429
あとがき 1　450
あとがき 2　452
あとがき 3　455

もんとりおうる
けべく
しがのこ
ぼすとん
にゅうようく
わしんとん
にゅうおるりいんず
ばんくうばあ
しあとる
とうきよう
諸島
はゆい島
ほのるる
くあ
しき
なし
ぼし
てい
あと

何でも見てやろう

まあなんとかなるやろ――「留学生業」開業――

ひとつ、アメリカへ行ってやろう、と私は思った。三年前の秋のことである。理由はしごく簡単であった。私はアメリカを見たくなったのである。要するに、ただそれだけのことであった。

それ以外に言いようがない。先ず大上段にふりかぶって言えば、もっとも高度に発達した資本主義国、われわれの存亡がじかにそこに結びついている世界の二大強国の一つ、よかれあしかれ、われわれの文明が到達した、もしくは行きづまったその極限のかたち、いったいその社会がガタピシいっているとしたら、どの程度にガタピシなのか、確固としているなら、どのくらいにお家安泰なのであるか、それを一度しかとこの眼でたしかめてみたかった、とまあそんなふうに言えるであろう。アメリカについて考えるとき、あるいは議論するとき、実際、私は何か空虚な観念の空マワリみたいなものに悩まされていたのだった。

アメリカの現代文学がむやみやたらと好きであったということも、私をアメリカ行きに駆りたてた一つの要因であろう。誰だってある国の文学に凝れば、その国のもろもろが見たくなるではないか。といっても、私が「文学的散歩」とやらの愛好者であると思ってくださると困る。私はもっと単純な人間であろう。小説の筋など読んだはしから忘れてゆく便利なたちの私は、たとえば、ニュー・イングランドのソローゆかりの地ウォールデン池（ポンド）のほとりにたたずんで懐旧の情に身をゆだねる、とい

うようなことはもっとも苦手とするところなのである。私はボストンに住んでいたからよくウォールデン池（ポンド）に出かけたが、それはソロー氏のイオリのあとにたたずみに行ったのではない。水泳のためであった。水は冷たいが、なかなかよい泳ぎ場であった。

そんな高級な文学的なことより、私には、いったんこうと思いこんだら、ぜがひでも見に出かけなければ気がすまないというアホらしいほど旺盛な好奇心があるのだ。そいつが私をアメリカへ放りやったといってよい。とにかく、私はくり返そう、私はアメリカを見たくなった。ただそれだけのことであった。

アメリカのもろもろのなかで、とりわけ私が見たいと心ひそかに憧れていたものが三つあった。話があんまり単純で子供っぽいので、ここに書くのがいささか気がひけるくらいだが、それはニューヨークの摩天楼とミシシッピ河とテキサスの原野であった。というと、なるほど、おまえは要するに大きなものが好きなんだな、とうなずかれる向きもあろう。そのとおりであった。私は、自然であれ、人間がこしらえたものであれ、大きなもの、それもばかでかいものが大好きなのである。ばかでかいものを見ていると矢も楯もたまらなくなるといってよい。たぶん、それは、そのばかでかいもののなかに潜む（とあるいは勝手に私が想像する）わけのわからないエネルギーの塊のようなものが、私を故郷にひきつけるようにグイグイとひきよせるのであろう。私は、友人のあいだで、ずいぶんと原始人、あるいは野蛮人の定評のある男であった。

このばかでかさは、もちろん、摩天楼や大河や原野にかぎったことではない。人間についても同じことが言えるであろう。たとえば、ばかでかい理性、情熱、洞察力、想像力、空想力、ばかでかい好

奇心、もの好き、陽気さ、のんきさ、あるいは途方もない怒り、悲しみ、笑い、あるいはまた野放図な食欲、咀嚼力、消化力――そういったものの根底には、おそらく、ばかでかい人間エネルギーが存在し爆発しつづけているのであろう。私はそれを感じ、そしてシャニムニそれにひかれて行く。私のばかでかい好きを分析すれば、まあそういったところであろう。

もっとも、実際に私がそれら三つのもの、ニューヨークの摩天楼、ミシシッピ河、テキサスの原野を目撃したとき、私がそれらをそれほどまでにばかでかく感じなかったことも事実である。ばかでかさにガンと参るということもなく、ハハン、なるほどね、くらいのところで、自然にスルスルとそれらの風景のなかに溶け込んで行けた。といっても、アメリカのばかでかさが小さいと言っているのではない。私にとっては、アメリカのものばかりではなく、メキシコの原野も、イランの砂漠も、ガンジス河も、そんな感じであった。このことは、あながち、すべてがすべて、そうした風景が私の想像のなかで、いつのまにか途方もなくばかでかいものにまでふくれ上がっていたせいでも、私が特異体質、いや、特異感覚の持主であったためでもない。それも幾分かはあるにしても、根本のところは、私自身をもふくめて、われわれ日本国の住民の感覚が、そうした風景にのまれてしまわれない程度にまでははけっこう大きくなってきているためなのであろう。すくなくとも私のような若い世代については、そんなふうに思われるのである。

この後日の「幻滅」はさておいて、とにかく私の脳裏に、ここ四五年来、前記三つのものが去来していたのだった。それらは私が対すべき、そして何ごとかそれに対して自分自身の決をつけるべき一つの目標でさえあった。つまり、私はその三つのもののなかに、それまで私が学び知ってきたアメリ

カというものの集大成を読みとっていたのであろう。アメリカ、またアメリカ人の持つタフさ、底抜けの明るさ、人のよさ、ときにはやりきれなくなる彼らの「善意」、途方もない底力、要するに例の「開拓者魂（フロンティアー・スピリット）」とやらいうもの――私にとって、アメリカとは何よりも先ずそうしたものであった。すくなくとも私の胸に切実に響いてくる、自分がまっこうから対したいアメリカとは、そんなものであった。

もう一つつけ加えておこう。私はそれら三つの風景のなかで、摩天楼というものにもっとも心をひかれていた。他の二つのものが自然のばかでかさというものであり、したがってアメリカでなくては見られないというたぐいのものでないのに対して、摩天楼はこれはもうどうあってもアメリカのもの、アメリカの人間の意志がそこに働き、彼らの労働がそこに凝集してつくりあげたアメリカ独自のものであろう。それに摩天楼は、同じ人間がつくりあげたものだといっても、エジプトやメキシコのピラミッドやアテネのパルテノンではない。大きく言えば、われわれの文明が二十世紀になって行きついた（行きづまったと見るのも自由だが）極限のかたちを最も端的に象徴するものであろう。アメリカに出かけるまえ、想像のなかの摩天楼に対しながら、私はたぶん次のように感じていたのである。二十世紀のわれわれの文明が、われわれの手に負えないほどに巨大な、ばかでかいものになっている、あるいは、そうなりつつあるなら、そのばかでかさというものに、ひとつ直面したい。そいつが重圧となって私の頭上におおいかぶさってくるなら、その下で自分を試したい、コトバを変えて言えば、自分の存在を確かめたい、と。

しかし、いくら摩天楼の下で自分を試したい、自分の存在を確かめたいといっても、現実のところ

は、私は一文ナシであった。私のそのときの存在自体が、大嵐の日のエンパイア・ステート・ビルのようにグラグラとゆらいでいた。私は小説を書き、ある大学の大学院学生だったが、そんなものはすこしも金の卵を生み出してくれはしない。ある感化院みたいに騒々しい私立高校で英語を教えて、それで辛うじて私はメシを食っていた。

幸いにして、留学生という制度がある。ことに戦後はどうした風の吹きまわしからか、世界各国が競って日本の学生を招きだしたから、これを利用するのが得策というものであった。それに、私のかねがねの理想は「留学生業」を開業することにあったのである。日本から現在留学生を募集している国は、アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツ、オーストリア、イタリア、スペイン、イスラエル、インド、フィリッピンなど十指にあまるから、一年ずつ順ぐりに出かけるとしても、それだけでゆうに十年はタダメシを食えるではないか。おまけに見知らぬ他国の風物を見物でき、ひょっとすると、きれいな女の子と恋におちいるという気のきいたことだって起りかねない。

ことに優秀なのが、アメリカ政府募集のフルブライト留学生であった。念のため言っておくと、この「フルブライト」というのは、このけっこうなプランを思いついてくれたアメリカ国の上院だかの議員さんの名前であるが、どういう点でこいつが優秀だというと、他の国のは生活費だけで旅費はこっち持ちなのに、アメリカのは旅費もふくめて何から何まで丸がかえであるということであった。私のような一文ナシにこれほどふさわしいものはない。で、その試験を受けることにした。ちょうど試験が秋にあったのである。

「そやけど君は英語しゃべられへんのやろ」

新宿近くのゴミタメみたいなアパートの一室で寝ころがりながら私がその決意を表明したら、友人のKがまのぬけた大阪弁で即座に言った。私はうなずいた。英語教師でありながら、いや、それゆえにこそ、と書けば満天下の英語教師諸君の満腔の同情と共感を得ることができるであろう、私はオシとツンボであった。

「どうするんや？」

Kのほうが私より心配げであった。

「まあなんとかなるやろ」

私もまた、まのぬけた大阪弁で答えた。

思うに、もしこの私に生活の信条というものがありとすれば、それはこの「まあなんとかなるやろ」であろう。こいつがなかったら、アメリカへ出かけることもなく、そこでノホホンと一年暮らすこともなく、その帰途、日本まであの無鉄砲でユカイでアホらしいコジキ旅行をすることもなかったのにちがいないのである。

試験の願書を出してからも、私は依然としてのんきであった。正確に言えば、のんきであらざるを得なかったのである。ある日、私は志をたてて、ラジオの駐留軍向け放送というのを聴くことにした。たぶん演説か何かであったらしい、三分聴いて私はサジを投げた。三分間で私の耳が捉え得たのは、「十月」と「サクラ」と「出産率の低下」の三語にすぎなかったのである。この三語がいかなる論理的連関にたつのか、これが解けたら、それこそ私は新しい哲学の創始者というべきであろう。私はのんきであることに心を決めた。

私は大学院でふしぎなものを専攻している（すくなくとも、そういうことになっている）学生であった。私の専攻は古代ギリシア語であり、その文学であったのである。英語で「それは私にとってギリシア語である」と言えば、チンプンカンさっぱり判らぬ、ということであるが、このことはこういった試験には好都合なことであったかもしれない。私は根がおめでたいほうだから、原子物理学を専攻していますと人が言えば、たちまちその人の顔が湯川秀樹氏のごとく見えてくるのであるが、私のギリシア語もそういう効果を持っているのであろう。私が自分の専攻が何であるかを打ち明けると、ひとは必ず、こいつ左マキにちがいないと思案する一方で、おかたい学者であると見当はずれの推量をして、なんとなく安心してしまうのである。日本でも外国でもそうであった。

ニュー・デリーの税関で、私はテヘランの友人にもらったウィスキーの持ち込みがばれて、危く没収されかかったことがあった。禁酒国インドに数本の巨大なウィスキーの瓶を持ち込んだのだから、えらく問題になった。「おまえは何者か？」係官はつっけんどんに訊ねた。「学生である」「何を勉強しているのだ？　（このウィスキー野郎め！　という表情を彼はつくった）」私はできるだけ効果的にしずかに言った。「古代ギリシア語である」「ギリシア語？」彼はすっとん狂な声を出した。「つまりホメーロスであり、プラトンであり、アリストテレスである。あなたは大学時代彼らの名を耳にしたのにちがいない。インドの古代文化もすばらしいが、ギリシアのそれもすばらしいではないか」私がそう言ってインド、ギリシア両文化の比較論を展開しようと思ったら、彼はわけのわからぬようなわかったような表情で、「しっかり勉強してくれたまえ」と言い、ウィスキーは持って行け、という身ぶりをそれにつけ加えた。

こんなこともあるものである。ことに日本人とギリシア語というとりあわせは、韃靼（ダッタン）人とホッテントット語のとりあわせと同じような効果を西洋人にあたえるらしい。私が自分の専攻を言うと、間髪を入れず、「ＷＨＹ？」と反問してきた人がかなりいた。微笑が必ずそのあとにくる。いや、私がひそかに恋い焦がれていた女の子などは、私がギリシア語専攻の学生であることを知ると、やにわにけたたましく笑いはじめて、ついに私に愛を告白するチャンスを永久に失わせてしまった。

女の子にあたえたのと同じ効果を、私のギリシア語はフルブライトの試験委員諸氏にあたえたのであろう、私を「面接」したフルブライト一党はまさに笑いづめであった。そこへもってきて、私は小説を書く男というおかしなふれこみであり、かてて加えて、英語がかいもくしゃべれないときた。まったくのところ、「おまえは大学で何を研究しているのか？」と訊かれて、「私は昼食には地下食堂で金三十五円ナリのミソ汁つき定食を食べることにしている」と答えていては、そいつを聞いたほうでは笑い出すよりほかはないではないか。

もっとも、こうした奇妙な問答も決してスムーズに運んだわけではない。私は一問につき平均三度は「もう一度言ってくれ」と言い、その上で処置ないときは、キテレツな答えを組みたてることにしていた。したがって、やけに時間がかかった。それに、面接は二回あり、一回目で私の勇名をきいたのであろう、二回目最終のには、用事のなさそうな連中まで大挙して押しかけて来ていたのであって、およそ全員が思い思いのことを訊ねるのである。もし私が原子物理学者であるなら、いやギリシア語でもよろしい、要するにキマジメな学者というものでありさえすれば、質問者の数も質問の種類もしぜん限定されてきたことであろう。悪いことに、私は小説を書く男であった。こんなおかしな男には、

誰でも、何でも訊いてやれ、できるだけ変ったことを訊いてやれ、ということになる。実際のところ、その日のフルブライト一党は、私を訊問することを十分たのしんでいたかのように見えた。私もまた何かしらたいへんユカイであった。

やっとのことで放免となり、廊下をノソノソ歩いていたら、一党の一人が追いかけてきた。こいつはもっとも難物の英語を話した男であった。彼は廊下のまんなかで私を呼びとめると何か言ったが、それがまた判らない。二三度押し問答のあげく、「おまえは、これまで一度たりともアメリカ人と会話をしたことがなかったであろう」というようなことを言っているのが判った。事実である。それで私は、「そんなことはぼくの英語をきけばすぐ判ることではないか」と答えたら、彼は「まったくその通り」と、大きくうなずいた。

これで合格マチガイナシ。私はそう確信した。

その通りになった。たぶん、くだんの男が有力な一票を投じてくれたのであろう。私は彼をはじめフルブライト一党を、あの「面接」で十分にたのしませたのだから、それぐらいの報酬はあってしかるべきである。合格の通知を受けてから、フルブライトの日本支店のようなところへ出かけて行ったら、「おまえがこの間の小説を書くという男か?」と言って、わざわざ私の顔を見にきた男までいた。

しかし、フルブライトの試験に受かったからといって、べつにそれでもって私の英語が進歩するわけでもない。私は依然としてオシとツンボであった。それでは困る、おまえはこれから例の視察旅行とか称する「物見遊山」に出かけるのではなく、れっきとした「留学」に行くのではないか、オシとツンボでどうするつもりだ、と他人事ながら心配してくれる親切な人がいた。それで、その人への義

理もあって、ある日、私はある「会話学校」へヒョコヒョコ出かけてみた。事務所の爺さんが、当校の卒業生から多数のフルブライト留学生を出しています、あなたもここで勉強してフルブライトの試験をお受けなさいよ、と激励してくれた。いや、もうその試験には通っているんです、ともまさか言えないであろう。バカらしくなってやめることにした。そんなお金があれば、ビフテキでも食って家で寝ているほうがよろしい。「まあなんとかなるやろ」私の結論は依然として簡単であった。

何でも見てやろう――美術館から共同便所まで――

出発はそれからほぼ一年後、五八年の夏であった。

出かけるにあたって、私は一つの誓をたてた。それは「何でも見てやろう」というのである。これは、行くからには何でも見ないとソンや、といういかにも大阪人らしい根性からでもあるが、もともと、私は何でも見ることが好きな男であったのである。それは私のタチでもあり主義でもあった。東京でも大阪でも、その他どこでも、私はむやみやたらと歩きまわり、むやみやたらとものを見て、そんなことで、あたら貴重な青春を浪費していたのである。

私はかねがねトーマス・ウルフというアメリカの作家を敬愛している。こいつは、ばかでかい小説を四つか五つ書き、それでポックリ死んでしまった誇大妄想の塊みたいな男だったが、この男もまた私同様の「何でも見たい」病にとりつかれていたらしく、彼の自伝的小説の記述に従うと、深夜、彼はベッドの上に坐って、彼が生まれてこのかた見た橋の数、ビルディングの数、会った人の数、いっ

しょに寝た女の数を克明に数えあげて、世界にあるそれらすべてをすませるまでは果たしてあと何年かかるのかと嘆息するのであるが、私にもそんなアホらしいところが大いにあるのだろう。「おまえは要するに誇大妄想狂なんだよ」友人はよく私にそう言ったが、私は「なに、ルネサンス的なんだ」と答えて、胸をひと張りすることにしていた。

つまり外国へ行って、いや、べつに行かなくったってよろしい、この日本国のことでもよい、めいめいの趣味、主張、主義にしたがって、上品なところ、きれいなところ、立派なところばかり見る、あるいは逆に、下品なところ、汚いところ、要するに共同便所のようなところばかり見てくる、私はそんなことはきらいである。世の旅行者というものはたいていその二つ、上品立派組と共同便所組のどちらかに所属してしまうようであるが、これはどうもやはり困りものではないのか。ひとつの社会というやつは、どこだって、美術館だけでできあがっているのでもなければ、どこへ行っても共同便所ばかりというようなこともないのである。美術館もあれば共同便所もあり、山の手もあればスラム街もあり、国会議事堂もあればキチガイ病院もあり、美人もいればシワクチャの婆ちゃんもおり、総理大臣もいればオコモさんもいるのである。それが「社会」というものであろう。

いや、ことは一国の社会についてだけでない。話を横に大きくひろげて、われわれの「西洋」理解についても同じことが言えはしまいか。各人がその趣味、主張、主義、あるいは偶然、必要によってイギリスならイギリスに行く。そうすると、もうそこが彼にとってのただ一つの「西洋」というものになり、それが絶対確実の不変の真理みたいなものになり、なお、やっかいなことに日本に帰りついたあとでも、その真理をふりまわして日本のもろもろを、ああでもない、こうでもないとやっつける。

しかし、「西洋」もまたやたらと広いのである、早い話、あの七面倒くさい食卓作法というやつもである。日本国で教えられるところにしたがえば、「西洋」ではスープは手前からすくってのみますということであるが、それはイギリスでのことであって、フランスへ行けばまったく逆となるではないか。私を「西洋」へ送り出したフルブライト一党はまことに親切な人たちの集まりであって、「テーブル・マナー」の大家と称するオバチャマを呼んで一席講義をうけたまわらせてくれた。オバチャマはザマス口調で、食卓にヒジをつけてお食べになりませんようにとか、くれぐれもお食事のあとで楊子をおつかいになりませんように、あれは日本人だけのすることで「西洋」のお方はおやりになりませんから、と言って何がおかしいのか、ホッホッと上品に笑われたが、なるほどアメリカ、イギリスではそうであった。しかしパリへ行けば、みんな食卓にヒジをつけてムシャムシャやっていたし、スペインでは誰も彼もメシを終えるといっせいに楊子をつかい出すのであった。パリで、アメリカの女の子がしみじみと語ったことがある。私は小さいときから食卓にヒジをつけて食べないようにと、そればかりしつけられてきた。それが今こうやってヒジをつけて食べていると（私と彼女はレストランで話しているのだった）、私たちがどんなにアホらしいことに精いっぱいになっていたか、どんなに田舎者であったかが判る。彼女はそんなふうに言うのであった。

「何でも見てやろう」主義にしたがって、話を急転直下させてトイレットのことにおもむこう。「西洋」式トイレットというのも、いつもいつもあの腰カケ式のやつだと思っていると大チガイで、フランスからスペイン、イタリア、ギリシアの南ヨーロッパ一帯にかけては、日本のに似たトルコ式トイレット（と呼ぶのだそうである。なるほど中近東ではすべてそうであった）のほうがむしろ普通なのであっ

た。それは、おまえの泊まったところが場末や貧乏人のところばっかりだったからだとおっしゃるかもしれない。それはたしかにそうであろう。しかしである、私はクレタ島はフェストスの遺跡で女王様のトイレットの跡なるものを見たことがある。クレタ文明というのは、最近の文字の解読でギリシア文明とのじかの結びつきが明らかにされてきているのだが、そうすると、それは「西洋」の本源のそのまた本源ということになる。フェストスはクノッソスと並んでそのクレタ文明の一大中心地だったのだが、そこの女王様のトイレットはトルコ式であった。

話をもう一度ひき上げることにして、メシどきの飲みもののことにしよう。これは案外知られていないことであるが、アメリカ人はメシを食いながらコーヒーを飲む。これはまさに食いながらであって、ビフテキの一片を口にほうり込んでおいてコーヒーを一口飲み、ついでサラダをつまみ上げるといったぐあいにやってのけるのである。私と前記アメリカの女の子がパリであるときこれをしたら、まわりのフランス人がみんな眼をむいて、この田舎者の礼儀知らずめ！　といったふうに私たちを見た。私も彼女もいたずら好きだったから、それからも機会あるごとにそいつを試みようとしたが、これはたいへんに困難なことであった。フランスのレストラン（私と彼女が行ったような安レストランに関するかぎり）は、コーヒーのたぐいなど供さないのである。では、何をメシどきの飲みものとして供するのであるかというと、これはいわずと知れたブドー酒である。同じものがちょっと北へ行ってドイツ、デンマークとなるとビールに化ける。いや、同じアメリカ大陸だって、メキシコへくだれば、もう誰だってビフテキにコーヒーを混ぜるような途方もないことはしないのであって、やはりこれも、あのすてきなメキシコ製のビール、セルベサスということになるであろう。

ついでに、もう一つ、飲みもののことを書こう。どこの国へ行っても、そこの国民が好む飲みもの、ホッと一休みするときに飲むもの、日本でいうならお茶にあたるものが必ずある。（私はこれを「国民飲料」と呼ぶことにしている。）アメリカでなら、これはさしずめドラッグ・ストアで飲む一〇セントコーヒーであろう。イギリスでなら、あそこは紅茶ならでは夜も明けぬ国だから、もちろんあの牛乳入りの甘たるき紅茶。フランスへ行くならカフエ・オー・レ、あるいはカフエ・クレーム、スペインならチョコレート、イタリアではエスプレッソ・コーヒー、ギリシアは小さなコップに入ったトルコ風コーヒー、メキシコのこともついでにまた言っておけば牛乳入りコーヒー、カフエ・コン・レッチエ……

これが「西洋」なのである。というと、私の言いたいことはもはやお判りであろう。旅行者が「西洋」へ行く、あるいはそこに住みつくということは、「西洋」なんていう抽象的存在は日本にいるインテリのオツムのなか以外にはどこにもないのだから、彼は「西洋」のどこかの国へ行って、そこに住みついているということになる。そこは、たとえば紅茶の国だったとする。そこではひとびとは、あたかも紅茶だけが人類が飲みうる唯一の飲みものであるかのように、そいつを来る日も来る日も飽きもせずに飲んでいることであろう。これがどんなにアホらしいことであるかは、ヨーロッパを一国一日か二日の割合でヒコーキで旅行をしてみるとよく判る。一時間前には老いも若きもがえいえいとしてチョコレートを飲んでいたのが、今度は紅茶である。どこへ行っても、誰に会っても紅茶を飲みましょうということになる。旅行者はそいつを滑稽に思うだろう、トーヘンボクめ、たまにはコーヒーでも飲めばいいじゃないか、と憤慨したくさえなるかもしれない。しかし、やがて彼自身も来る日も来る

日も紅茶の波にもまれているうちに、そいつが絶対無比の飲みもの、いわば真理にまで上昇する。そして、いつのまにか、彼は他の国のもろもろを、その真理を通して眺めはじめる、批判しはじめる、やっつけはじめる。いや、まだある。彼はやがてその真理を抱いて、故国に帰るだろう、故国のもろもろをその真理でもって快刀乱麻に切りすてて行くことをはじめるのかもしれない。

ことは「西洋」に関してだけではないのである。アジアについても、アフリカについても、同じことがひょっとしたら今言えるのではないか。かつて英国帰りが英国の眼を通して故国を眺めたように、われわれは、今、たとえばインドならインドを通して故国を遠メガネで捉えているといったふうなことをやりはじめていはしまいか。インドにはネルーというそれこそ真理のような人がいて、インドはその点ではまさに便利な国であるが、ネルーはネルーであって、われわれではないのである。

こんなふうに言うと、私がアメリカに行くまえ、「何でも見てやろう」という誓をたてたことは、それはそのままアメリカからの帰途、ヨーロッパ、アジアをぐるりとまわって、できるかぎりいろんな国、いろんな社会を見てやろう、というぐあいに私が考えていたことになる。その通りであった。アメリカという「西洋」の一角に行くなら、その本場であるヨーロッパを見ることは私にとって必然であった。ヨーロッパへ行くなら、私の所属するアジアを見ることは必然であった。とにかく、私は「何でも見てやろう」と思った。国会議事堂から刑務所からスラム街から金持ち街から豪華ホテルから簡易宿泊所からカテドラルから広告塔から何から何まで、そしてまた、コーヒーの国、ビールの国、ブドー酒の国、チョコレートの国、紅茶の国、可能なかぎりのさまざまの国、さまざまの社会、そこに住み、うごめくさまざまの人間、それらすべてを見てやろう、私は誇大妄想狂あるいはルネサンス

人である私にふさわしく、そんなふうに考えたのである。

「考える人」――いよいよ出発――

船で太平洋を渡った。日本船であった。

船のなかのことはべつに書かなくてもよいだろう。毎日、食ったり飲んだりして、あとは眠ってばかりいた。あまりたくさん食ったり飲んだりしたので、私のテーブルにだけ、いつもボーイが気をきかせて余分にくれるようになった。こうなればしめたものである。私とボーイとの間に食物に関して意思が疎通し合うようになり、ボーイは私がひとつ大食のレコードでも破ってくれないかと期待すれば、私も私で、ひときわ奮発して食いに食うのである。ことに、シケで食堂に人影まばらなときには、それはいっそうそうなのであった。

こういうボーイ氏と私との間のうるわしい友情は、もちろん、日本のボーイ氏だけにかぎったことではない。アメリカからの帰途、ヨーロッパをほっつき歩いていたときだった。マドリッドの空港で、ヒコーキがおくれて、われわれ乗客がすべてタダで晩メシの御馳走にあずかったことがあった。私はもうそのころは一日二度ときめた食事もろくにとれないほどの窮乏状態におちいっていた矢先であったから、それはたいへんありがたく、したがって私は食べに食べた。明日はおろか明後日の分まで、私は食いだめをしておく必要があったのである。さっそく特配がきた。一人のボーイ氏が私の食いっぷりを認めたのである。彼は何かスペイン語で私に言ったが、それは「おみごと！」などというお世

辞であったかもしれないし、それとも、「これでおまえさん、もう何日メシを食っていないのかね？」と訊ねていたのかもしれない。たぶん後者であったろう。髪はボーボーで風呂などというしろものにはもう一と月このかた入ったことがなかったから、はじめは、彼はウサンくさげに私をじろじろ眺めまわしていたのであった。私が特配を食べ終ると、彼は他のテーブルから果物やらパンやらチーズやらを持ってきて私の前に並べた。そして、ポケットのなかにしまっておけ、という身ぶりをさかんにする。私がポカンとそれを眺めていたら、彼は自分で、かたわらの椅子の上にほうり出してあった私のすりきれたオーバーをとって、そのポケットにそれらの貴重なる物品を押し込みはじめた。

ありがたいことであった。私が感謝のコトバを述べようと、それも気のきいたスペイン語で言ってやろうと、満腹でいささか朦朧となった頭脳にノロノロと命令を下しているうちに、彼はそれだけの作業を終え、そそくさとテーブルから立ち去って行った。見れば、ボーイ頭とおぼしき人物が現われ出てきたのである。彼はボーイ頭の背後から、黙っていろ、とでもいうふうに片眼をつぶってみせた。

もちろん、こういうことは男性のボーイ氏だけにかぎったことではないのであって、ヒコーキのなかでは、スチュワーデス嬢がよく食事のお代りをくれた。満足にメシが食えない状態であった私は、いつもメシつきのヒコーキを選んで乗ったのだが、お代りをくれたのはあれはどういうわけからであったろう、べつにもの欲しげにしていたつもりはないが、私がよほど男性的魅力に富んだ人物であるのか、それとも私の胃袋の空虚さが垢だらけの私の体から放散する異臭とともに彼女を打ちのめしたのにちがいないのである。このスチュワーデス嬢のお代りには、お代りをもらうことで彼女とグンと親しさがまし、あげく、目的地でのデイトにしぜんに移行するというちょっとしたオマケまでつい

ていた。ことにスカンジナビア航空のあのうつくしい金髪娘F嬢は――いや、この話はやめにしよう。ここでは食事の話をしているのであって、それ以外のことはなんら語っていないのである。それどころか、私はまだ太平洋を渡りきってはいないのである。「とにかく、おまえのは胃袋が食っているのではなくて、心臓が食っているんだ」ある友人がまさに適切な批評をしてくれた。

ハワイが私にとっての最初の外国であった。私はいよいよ英語を話さなくてはならない。いささか武者ぶるいを感じながら船を下りたが、ここではべつに英語など知らなくても用は足りるのである。なにしろ人口の半分以上が日本人一世、二世、三世の土地だから、たいていの連中が日本語を解するのであった。道をききたければ、そこらの店にとびこめばよい。七十がらみのオバアチャンが英語入りで教えてくれる。「そこんところにカーが来るね、ブラックのカー。そこを右へターンして……」

これくらいの英語入り日本語なら、無学な私にもまだ判るが、二世、三世氏のはすこぶる難解であった。ある野外劇場のようなところで、たぶん三世氏らしいのが、ここでは「マイ・サンデー」に「バン・コンサート」があるというので何かと思ったら、それは「毎・サンデー」に「晩・コンサート」があるという意味であった。ついでながら、その三世氏は「生長の家」の熱烈な信者であったことも付記しておこう。

日本人街というものにも行ってみた。「森の石松」の映画のポスターが壁にヒラヒラしていて、そのかたわらで一世の老人二人が将棋をさしている。そんなふうなえらくみすぼらしい感じの街であったが、ちょっとおどろいたのは、そこにゴロゴロしている二世、三世連中の体の大きさであった。みんなプロレス選手まがいに、大きく、まるまると肥えている。これはひとえに食いものと気候のせい

なのであろう。大きくなりたい人は、「あこがれのハワイ航路」とやらに乗って、ハワイへ出かけることである。

しかし、もしあなたが、東京のような世界一娯楽設備がととのっていて刺激的で賑やかなところからはるばる行くとしたら、二三日でアクビの連発であろう。パール・ハーバーは要するに、いくさ船に油と水とマンゴーを積み込むわれわれにはエンもユカリもない（かつては妙なかたちでエンもユカリもあった）ところであり、ワイキキの浜辺も、つまるところは砂浜であり、フラ・ダンスはハワイ土人の盆おどりであったということが判ってしまえば、さてもうほかには出かけるところは余りない。致命的な欠点は、せまいということにあろう。私のような、だだっ広い、広いだけで何もないようなところが好きな人間は自殺でもしかねないのである。ホノルル市の背後に、オアフ島の分水嶺とでもいうべきヌアヌ・パリ峠があるが、そこは自殺にかっこうな場所と見えた。切りたった断崖がそびえていて、太平洋を見わたしながら悠然と身を投ずることができるのであるが、そこは下から吹き上げてくる風の強いことで有名な場所で（何を基準にして言うのか知らないが世界で三番目に強いということであった）、自殺者がみずからの体を落下せしめることはとうてい不可能であるという説もあった。もっとも、私が「ためしにやってみようか」と言ったら、その説を紹介してくれた当の本人が「およしなさい、引き上げるのにお金がかかって困る」とたしなめたから、それはやはりマユツバであろう。

夜がきたのでフラ・ダンスを観に行った。ごく安い大衆的なところというふれ込みのに入ってみた。海に面していて、海水浴場によくあるヨシズばりの劇場の感じであった。スイカでもパクつきながら、アロハ娘のフラ・ダンスを見物するしかけになっている。

適当なところに腰を下ろしてボーイが来るのを待っているうちに、私はふと砂浜からこちらをのぞきこんでいる立ちん坊氏の列を見いだした。あれでやればスイカなど食って一ドルつかうこともないではないか、私はそいつに気づくとすぐ外へ飛び出て、アメリカ人立ちん坊諸氏の列のなかに入った。砂浜は涼しいし、第一、よく見える。舞台のソデのところで、さっきまで微笑満面だったフラ・ダンス嬢が、いかにもバカバカしいことでしたとでもいうように大アクビするのまで一目瞭然なのである。

深夜、私は思いたって深夜のホノルル散歩に出かけた。私は何でも見ておかねばならないのである。船を出ようとすると、見張りに立っていた大きなポリス氏が、私の肩をかるく叩き「グッド・ラック」と言ってニヤニヤした。女を買いに出かけるのだと思ったのかもしれない。

南国の街の深夜は静かであった。かれこれ二時間近く、私はあてもなくホノルルじゅうを歩きまわった。ある大通りで、巨大なものが巨大な音をたてて近づいて来るのに出会った。

それは清掃トラックであった。巨大な真空掃除器が大型トラックの下部にくっついていて、それでもって街路のゴミを一気に吸い上げて行く。トラックが動くにつれて、ズーズーという巨大な音響が静まりかえった深夜の街にこだました。その音をきいているうちに、はじめて私の胸に、ここは外国だな、という感慨がわき起ってきた。

＊　＊　＊

ハワイを出て一週間後に、船はアメリカ本土に着いた。シアトルである。

船および私自身がアメリカ本土についたということを私にはっきり知らせたのは、摩天楼がチョロチョロとまじるシアトルの街景でも、コーヒーのコップをほうり投げるようにしてよこすドラッグ・ストアのオヤジでもなくて、船客のなかにまじっていた一人のアメリカの女の子だった。小学校六年生くらいの年ごろのなかなか活発でユカイな子供で、かなり流暢な日本語を話したから、船のちょっとした人気者であった。私もピンポンのお相手をおおせつかったことがある。彼女がとりそこねて球が甲板の上をコロコロ転がって行っても、たいていの場合彼女はとらず、アメリカの女というやつは子供でもけっこうたいへんであるな、と私を奇妙な感慨に走らせたが、コトバのほうは、これは日本のかわいい女の子のそれであった。私が球の走り拾いに疲れてやめようとすると、「もうやめるの、つまんないわ」と口をとんがらかせる。

さて、その女の子だが、船がシアトルに着くと同時に、ガンとして日本語を話さなくなったのである。日本語で話しかけてみても解らないふりをしたり、英語で答えたりする。もう故郷だから日本語はいらないというわけなのか、少しばかり胸にコツンときた。

シアトルからは汽車で大陸を越えた。いわゆる大陸横断鉄道というやつである。シアトル・シカゴ間には数本そういうのがあり、各線にそれぞれ「帝国建設者（エンパイア・ビルダー）」号とか「西部の星（ウエスターン・スター）」号とか名前をつけた特急列車が走っていて、およそ五十時間でつっぱしる。日本の「こだま」号とかいうのを一まわり大きくして、遊園地の汽車ポッポよろしく極彩色にぬりたくれば、そんなふうな感じになる。

乗ってみてはじめて気づいたことだが、実は、各線とも一日に一本か二本しか、汽車、すくなくとも長距離列車は走らぬのである。したがって線路は草ボーボーで、そこんところを、私の乗りこんだ

「帝国建設者（エンパイア・ビルダー）」号は孤独にひた走るのであった。

シカゴ・シアトル間は、西部に関するかぎりだいたい原野であり、各線ともみんな似たりよったりのところをひた走るのだから、われわれの常識からいうと、ひとまとめにして一本の鉄道の上にたくさんの列車をゆきさせたほうがよいような気がする。しかし、ここは自由企業、自由競争の国であって、その各線とも実は会社が違うのだから、これもいたしかたのないことかもしれない。それにしても、いささかもったいない、と私が「帝国建設者（エンパイア・ビルダー）」号のなかであるアメリカ人に言ったら、ヘエ、世ノ中ニハソンナ考エ方モアルノデスカ、というような顔をその人はした。

おかげで汽車賃はべらぼうに高くなる。今日どこかへ行くのに汽車に乗るのは、バカか見エ坊か、それともほんとうの金持かであって、貧乏人はバス、ちょっとお金のある人はヒコーキに乗るのである。（自分の車で行くのは、ガソリン代と有料道路代と途中の宿泊費を考えると、家族、友人で大挙して移動するという場合をのぞくと、あまり得策ではない。もっともタダ乗り、ヒッチ・ハイクならべつである。）いちばん安いのはバス、ついでヒコーキと汽車のツーリスト・クラスがどっこいどっこい、いちばん高いのは汽車の一等。

とにかく鉄道はすでに時代おくれの存在であることが、アメリカに来てみるとよく判る。今日のアメリカは鉄道の墓場に満ちている。と言っても過言でないだろう。どこへ行っても、廃線、廃駅がうらびれた姿をさらしている。ことに田舎でそうであった。いや、堂々なる大幹線ですら、ある大鉄道会社のP・R誌を見ていたら、線路工事の写真があり、それには「本線の近代化（モダーニゼイション）着々と軌道にのる」という説明がついていた。単線を複線にしているところかと思ったら、そうではなくて、逆に

複線を単線にしているのであった。これは、いろんな意味で私を考えさせた。「近代化トハ単線ヲ複線ニスルコトデアル」というのがアメリカ以外のところでの常識であろうが、アメリカではその「常識」は通用しない。このことはどうも鉄道のみに関することでなくて、アメリカの社会を見ていると、あの社会はいろんなところでこうした常識はずれに満ちているように見えた。アメリカの社会を見るとき、われわれは、われわれの常識を一応うたぐってかかる必要がありはしまいか。

それはともかくとして、私はその「帝国建設者（エンパイア・ビルダー）」号では、バカか見エ坊か、それともほんとの金持かである一等客だった。フルブライト一党は、すべてによく気のつく人の集まりであって、私の「何でも見てやろう」という野望をとっくの昔に見ぬいていたらしく、船は三等であり汽車は一等であった。これは、私の二年間の旅の性格をもっともよくあらわしていることかもしれない。急上昇と急転落を、それからもめまぐるしくくり返したことになる。

私はそれまでは日本で学割切符で三等にしか乗ったことがなかったから、一等寝台室におさまったときはえらく感激した。しかし、それは余り感激することではないのである。黒ん坊のボーイ氏にはチップを必ずやらなければならないのであって、やはりこの一等というのはバカか見エ坊か、それともほんとの金持しか乗らぬものであることをはっきりと確認した。

それに車窓の風景は、一等に乗ろうがどうしようが、べつに変りはない。ロッキー山脈を越えるあたりを除いて、半日走っても大差はない、野っぱらであり、ただそれだけであった。

これは私のような生来動作鈍重な男には、まことに好都合なことであった。同車した留学生のなかに、牛が野っぱらに寝そべっている写真をとりたいという奇特な志をもった女の子がいて、私は何で

も女の子には安うけ合いをするほうだから、私にその大任が任せられた。「小田さん、牛がいるわよ」と彼女が叫べば、私はおもむろにカメラを開く。私がノロノロとカメラを眼の位置にかまえるころには、むろんのこと、牛などははるか後方に消し飛んでいる。が、慌てることはなかった。五分と経たないうちに、さっきと寸分たがわない風景が出現するのである。それが失敗なら、もう五分、それも駄目なら、さらにもう五分。同じように牛が五六匹ゆったりと寝そべり、ゆったりと野っぱらがその背後に展開する。アメリカだな、と思った。

そしてシカゴ。

シカゴは、実は私の憧れの都会であった。これはひとつには、シカゴ小説耽読の結果である。二つめには、私はギャング映画が好きであって、アル・カポネの街ときくと、それだけでうれしくなってくる。三つめには、シカゴはわが故郷大阪と似ているからである。活力に満ちていて、在野精神に富んでいて、お金の町であり、工場のむらがるところであり、汚くてそして無限に美しい。大阪とシカゴの差は、つまるところ、歴史のそれだけであろう。シカゴの駅を一歩出て、頭上を轟々とすぎる高架鉄道の汚い車輛の列を見たとき、私は故郷にかえったようにホッとひと息ついた。

百貨店へ行ってみた。私は百貨店というものが妙に好きで、どこの国へ行っても百貨店訪問を欠かしたことがない。もちろん誰もが言うように、日本の百貨店は世界一という判りきった結論になるが（念のため言っておくと、サービスにおいて、キレイであるということにおいて、品物の数の多彩さ豊富さにおいて、売子が若い女の子で、それもおおむね十人並み以上の容貌の持主であるという点において、タダでお茶をくれる点で、たえず展覧会というのをしていてピカソから殺人犯の使用したピ

ストルまで見せてくれる点で、ヤカン一つでも無料配達してくれる点で、その他もろもろの点で、それはそうなのである)、シカゴには、全米随一の、やっと日本並みのが一つあった。しかし私の話そうとしているのは、その立派なのではない。場末のババッチイのであった。私はそこでトイレットへ入ったのである。

トイレットには扉がまるっきりなかった。アメリカ人はこういう点は実に平気で、Y・M・C・Aという立派な泊まり場のなかにも往々にしてこういうのがあって、みんな泰然と腰を下ろしているが、くだんのトイレットにも、ひとりの若者が「考える人」の姿態をしていた。

いささか躊躇したが、私は何ごとでも見、またやってみなければならない。それにそのとき、そうする必要が緊急に私にはあったのである。私もまた「考える人」となった。

「ヘイ!」

しばらくして、孤独であった私という「考える人」は隣室の「考える人」に声をかけた。

「今日はいやに暑いではないか」

こんなババッチイ百貨店には、日本とちがって、冷房装置などという気のきいた設備はしてないのである。隣室の「考える人」は肯定のむね答え、それから逆に訊ねてきた。

「どうだい、シカゴは? 面白いか?」

「まあね」

「職探しかい? 職なら、おまえ、ロサンジェルスへ行ったほうがよいぜ」

「しかし、シカゴもいいじゃないか。第一……」

私はそこで絶句し、それから、自分でも思いがけないことを口走った。

「詩的（ポエティック）だ」

外国語というものは暑さに極端に弱いものであって、頭が暑さでボケてくると必ず神がかりが飛び出してくるようになる。この場合もその適切な一例だが、それにしても、この思いがけないコトバは真実の気持からでもあった。常識はずれのことかもしれないが、大阪が日本でもっとも詩的な都会であるのと同様に、シカゴもアメリカでそうであろう。

「詩的（ポエティック）？」

となりの男はすっとん狂な声を出した。あたりまえである。いくら真実からくるコトバであっても、場所が場所である。常識からいうと、これほど非詩的な場所もないであろう。

「おまえは学校出だな。しかしシカゴは暑いぞ。冬は寒くてしようがないし」

「なら、どうしてここにいる？」

「おれはここで軍隊に入っているんだ。自由を守るために、おまえ、軍隊というものがいりまさあ」

彼はひどく公式主義的なことを言った。その口調は皮肉でも何でもなく、原爆でも水爆でも命令されればあっけらかんと落しかねないほど無邪気なものであったから、彼はほんとにそう考えているのだろう。しかし、いずれにしても、「自由の擁護」という問題もまた、この場所でとりあげるのにふさわしい論題ではない。

「おまえ、なかなかエイゴができるじゃないか。アメリカへ来て何日だ？」

「四日」

「フム、たいしたものだ」
彼の賞讃は耳に快かった。何でも、誰によってでも、ほめられるとうれしいものである。
「おれはフロリダで、おまえんとこと海一つへだてたところにいたんだ。スペイン語がちょっとやれるぜ」
話がおかしい方向にすべって行った。私は慌てて訊き返した。
「あんたは、おれがいったいどこから来たと思っているんだ？」
「判ってるじゃないか、おまえ、プエルト・リコ人だろ？」
思うに、日本の紳士諸君は、こんなところにまで遠征して思索にふけることもないのであろう。アメリカの植民地プエルト・リコからは目下食えない連中が大挙してニューヨーク、シカゴに押し寄せて来ていて、今日のアメリカの社会問題は黒人ではなくて実はプエルト・リコ人であるときいた。私もまた一文ナシのプエルト・リコからの移民のひとりであると、そんなふうに彼は判断したのにちがいない。私は自分は日本人であり、この国のピカ一大学ハーバード大学にこれから留学せんとする身であることを明かそうとしたが、場所が場所である、なんだか妙な気がしてやめにした。
これを皮切りとして、私は世界各地で、さまざまな人種、種族、あるいは部族にまちがえられた。だいたい、これは、私の旅行ルートが最低線上にあって、そこでは誰もが日本の紳士など見かけたことがなかったのが原因であろう。前記プエルト・リコ人、メキシコ人、アメリカ・インディアン、キューバ人、フィリッピン人、シナ人、アラビア人、いやギリシアでは、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、イタリア人、スエーデン人、フランス人、スペイン人（つまり私の泊まった寒村では、それまで

誰も外国人を見たことがないのであった）、イランではイラン北部の遊牧民ナントカ族、ニュー・デリーではネパールの商人、カルカッタではブータンのインテリ……

ビート猫・ＺＥＮ猫――アメリカ（猫）の悲劇――

その年の九月から、私はハーバード大学に一年いた。「いた」と書くだけで「勉強した」とも何とも書けないのは残念しごくであるが、それは私の性向としてやむをえないことであろう。それに、ハーバードが所在するボストンには、私のめざす摩天楼はあいにく一つか二つしかなかったのである。それで私はまったくしばしばニューヨークへ出かけた。ありがたいことに、ニューヨークには私にタダで宿を提供してくれるアメリカの友人たちがワンサといたから、行けば必ず二三週間の長逗留となった。

その友人たちとどうして知り合いになったかというと、先ず私が英語ができなかったからであった。奇異にひびくかもしれないが、それは真実である。

ハーバードにおちつくまえ、私はニュー・イングランドの田舎の女子大でひと月ほど暮らしたことがあった。フルブライト留学生は各自の志望大学に入るまえに「国際夏季学校（インターナショナル・サマー・スクール）」とかいうのに出席する義務があって、私はその女子大で開かれているのに出たのである。（ことわっておくが夏季休暇中であった。）何をしていたのかときかれると、こと私に関するかぎりは、ヒルネをしていましたと答えるよりほかはない。私はひそかに「国際ヒルネ学校」と名づけていた。

そのヒルネ学校に、たぶん彼らもヒルネに来たのであろう、作曲家の一団が合宿していた。アメリカには最近いろんな新発明のものがあるが、この作曲家の合宿もその一つであろう。何と訳すか、「コンポーザーズ・コンファレンス」とかいって、作曲家が避暑のシーズン中あちこちに群れつどい、何をするかといえば、ストラビンスキー、バルトークばりの（アメリカの作曲家たちに言わせると、二人は「アメリカ人」であった。アメリカの作曲家と話すときは、どちらかをほめておけばゴキゲンがよろしい）、ちょっとはじめのところを聴いただけで頭がガクンガクンしてくる音楽をやたらと製造するのである。

私のいた女子大にその一つがあり、彼らは毎夜コンサートを開いた。他にすることがなんにもないというしごく単純な理由から、私は聴きに出かけた。静かで単調な田舎にいると、彼らのたてる騒音は、けっこうアタマの洗濯機の役割をはたしてくれるものである。私はさっそく彼らの注目のマトとなり、いろんなやつが私に話しかけてきた。私は日本にいたとき、ベートーベンの運命交響曲のダダダダーンという勇ましい出だししか知らないので有名な男だったが、英語が話せないとは実に便利なことである。私は黙り込み、それだけで思慮ぶかく見え、私のたまに発言するコトバは千鈞の重みをもち、そのコトバというのがすでにシカゴの「考える人」でテストずみの神がかりだったから、あいつはすばらしく音楽の判るインテリだということになった。

ここでついでながら、外国で友人をつくる方法、ことに女の子と仲よくなる（すくなくともアメリカにおいて）方法を伝授しておこう。アメリカの女の子と仲よくするには、英語がペラペラでダンスを軽くこなし自動車の運転ができて、その上西洋人向きに女性にかしずくことがうまくなければいけ

ないと考える向きがあるかもしれないが、これはとんでもない謬見である。私には女の友人がワンサといたというのではないが、それでも二十六歳の知性あり魅力ある男性がふつう持つと考えられる程度にはいた。それで私の例で行くことにする。

先ず私は英語がペラペラのまったくの反対であった。（黙って坐っていると、アノ人神秘的ダワ、ＺＥＮぶっでぃすとニチガイナイワ、ということになり、一言二言何か神がかりを重い口調でつぶやくように言うと、スプレンディット、ワンダフル、となる。）次にダンスもできなかった。（パーティでいつまでも踊っているのはアホウか舞踏病患者であって、気のきいたやつはいいかげんに切りあげて、気に入った女の子と外へ出るのである。下手クソなジルバなどであたら貴重な精力を浪費しているより、おれはダンスなどくだらぬものはできぬ、それより外のしずけき暗黒のなかで宇宙の神秘について語ろうではないか、と言えば、それだけで女の子は参るのである。）第三に自動車の運転もできなかった。（由来、古今東西を問わず、女性は変った男性が好きになるものである。アメリカには、ダンスがうまい、自動車の運転ができる、というのは、それはその男がまったくの並みの男、なんの変てつもとりえもない男であるということになる。つまり、アメリカでは、ダンスができないということができる、自動車の運転ができないことができる、これが肝心なのである。私が、もちろん運転などできない、というと、マーベラス！　と叫んで手を打ってよろこんだ女の子がいた。）さて、最後のもっとも重要な女性に対する礼儀作法に関することであるが、私は男性横暴のありがたき国日本国においても、その点で有名な男であった。（私のように何もしないでいれば、女性のためにドアを開けることから皿を洗うことまでしてやる国では、それだけで変っていることになる。第一、私にそ

んなことをやらせるのは危くて見ていられないという。皿を洗えば一枚や二枚は崩壊し、オーバーを背中からかけようとしたらインク瓶がひっくり返って大さわぎになった。ＺＥＮぶっでぃすとハシズカニシテイテクダサイ、ソノホウガ魅力ガアリマス。あるとき、ある女性が、日本国では男性は恋人あるいは奥さんを呼ぶとき、いかなる呼びかけをつかうのであるか、と訊ねたことがあった。そのとき私は、彼女提供のマルティニの飲みすぎで頭がクルクルまわっていた矢先だったから、考えるのもめんどくさく、そいつは「oi」というのであると答えた。そのとき日本の女性たちは何と応じるのか、彼女はつづけて訊ねた。それは「hai」である。私は調子にのって言った。答えのほうは、アメリカ人は友人などに呼びかけるのに「ハーイ」というから、しごく覚えやすいのであった。当時、私はその女性と恋のマネゴトらしいものをしていたから、早速、実地に用いることにした。私が彼女のアパートに行き、「オイ、コーヒー」とどなれば、彼女は「ハーイ」と答え、コーヒーを持って来てくれる。これはニューヨークでは大いに気持よいことであった。）

というわけで、黙っているほうが万事よろしい。私は田舎の女子大で有名無名の作曲家たちとたちまち友人となった。彼らの大半がニューヨーク出身者だったから、オダよ、ニューヨークへきたら、おれのところで泊まれよ、ということになった。

私の最初のニューヨーク行は、ハーバードの新学期が始まる直前の八月末のことであった。着くとすぐ、私はそのなかでもとりわけ親しかったＴに電話をかけた。「やあよいところへきた。留守番を探していたとこなんだ」Ｔは開口一番そう言った。

きけば、彼と彼のルーム・メイト（同居して暮らしている友人のことを、アメリカ人たちはそう呼

ぶのである）は、三年ごしに計画していたロング・アイランドへの休暇旅行に出るところだという。ねがったりかなったりではないか、私は早速出かけることにした。

彼らのアパートはグリニッチ・ビリッジ近くのスラム街のまんなかにあった。判りにくい地下鉄を迷い迷い乗って、やっとこさそのアパートにたどりついたら、すでに夜になっていた。

Ｔのルーム・メイトというのに紹介される。Ｋという写真家あるいはその志望の男。Ｔ、Ｋともに、容易に想像されるように貧乏であった。Ｔはもっぱら失業保険で食いつなぎ（彼はかつて音楽雑誌の編集者だったことがあった）、Ｋはどこかの会社でアルバイトをしていた。

おまえの義務は猫に食事をやることだ。彼らはそう言い残して旅行に出かけて行った。アメリカの猫はいったい何を食うのであるか。私が彼らに最初に先ずそれを訊ねようとしたら、彼らのほうが先に同じことを訊ねてきた。日本の猫は何を食うのであるか？　魚であり米である。「ライス⁉　日本の猫はライスを食べるのか」彼らは呆れはてたような声を出した。

アメリカの猫族は、国富に比例して、やはり贅沢であった。先ず「キャッツ・フード」と称するおネコ様用カンヅメをおあがりになる。中身は魚肉のミンチ固めのようなものだったが、これだってなかなかバカにならないほど（すくなくとも日本円に換算すれば）高いのである。それだけでは足りないから、ＴとＫが一週間分を電気冷蔵庫のなかにためこんだヒキ肉をア・ラ・カルトとしてお用いになるが、そのなかには、水性ビタミン剤が数滴もちろんたらしこんであるのであった。

しかし、これでは生まものが絶対といっていいほど不足だから、いろいろ壊血病的症状に悩んでいた。抜け毛。カイセンに似た吹出物。もちろん医療設備はどこへ行ってもいたれりつくせりに完備し

ているのだから、ことがあれば連れて行けばよい。生まの魚をドシドシ食べさせなさいというような野暮なことは言わず、医者はビタミン剤を矢つぎばやに次から次へと注射するだろう。猫の存在自体が何かの拍子に不要になったら、そこへ連れて行けば注射で眠らせてくれるし、逆に毛並みのよいのが欲しければ、そこから貰ってくることもできる。去勢の手術をあらかじめしておくのが習慣のようであって、その点でもネコ医者は大はやりであった。

TとKの愛猫もそうだったが、たいていの猫はアパートに住んでいて、それも五階だて、十階だて、二十階だてというようなのが多いから、しぜん、一生せまい空間に飼い殺しということにあいなった。抜け毛の多いのも、一つには運動と日光の不足であろう。これは、そのまま、アメリカの男性が栄養のよすぎるためと運動の不足とで、二十五歳をすぎれば中年ぶとりにみにくくふとり、ハゲチャビンとなり、白髪となることを思い出させた。（あるお医者の説によると、アメリカ人は三十歳で中年に入る。）そんなふうに見てみると、アメリカの猫族はアメリカの社会の一つのみごとな縮図であった。カンヅメ料理とビタミン剤を運動不足の体におしこみ、ガラス窓を通して入り込んでくる弱い日光を慕って、おちつきなく動きまわり、おまけに去勢されてしまっているとあっては、私は心底からの同情を禁じえないのであった。いや、まだある。不要になればどこかへ処分し、欲しければ新しいのを手に入れる……

「アメリカの猫はまったくビートじゃないか」

私はそう言い、今書いたようなことをつけたしたら、TとKはうなずき、「そんなら日本の猫はZENブッディストかね」と、なかなかうまいことを言った。

なるほど、そう言えば、同じようにひなたに寝ころがっていても、アメリカの猫は人工衛星的にイライラしているふうだし、日本の猫はきわめて宇宙的に神秘に見える。

しかし、猫というやつは、ビート猫であろうとＺＥＮ猫であろうと、ソソウはするものである。ことに、西洋風のおふろというものは、あれは水が入っていないときは、ビート猫にとってのまことにけっこうなおまるになる。

私がビート猫のそうしたソソウのあと始末を黙々として、きわめてＺＥＮ的に行なっていたら、同じフルブライト留学生仲間だった新聞記者がやって来た。彼は私のそのざまを見てつくづく慨嘆して言った。「とにかく君だけだろうなあ、アメリカくんだりまで猫のウンコ掃除に来たのは」

つづきは製品版でお読みください。